平成 21 年 7 月 18 日
北関東フォーラム
於：湯島聖堂

中斎塾　北関東フォーラム
平成 21 年　第 7 回講話

おはようございます。では、恒例の質問から参ります。

恒例の質問

目を瞑って、考えてみて下さい。朝起きた時、どんな目覚めでしたか？　午前中は何をしていましたか？　夜はどうでしたか？　どれくらいの人と会って、どんな会話をしましたか？　昨日一日を思い出してください。

ではお聞きします。

「昨日一日、嘘をつかなかったと胸を張って言える方、手を挙げて下さい」

（・・・沢山手が挙がる）

「昨日一日、良い日だったと思う方、手を挙げて下さい」

（・・・沢山手が挙がる）

「有難うと言い、有難うと言われた方は手を挙げて下さい」

私は「有難う」とすっと言えるのですが、人さまから「有難う」と言われるのは一所懸命考えないと思い出さない。これはなかなか難しいと思います。どうぞ「有難う」と言い「有難う」と言われる一日一日を積み重ねてゆく、そして結果として、嘘をつかない日々が過ごせれば、良い 1 日、良い 1 週間、良い 1 ヶ月になると思います。

中斎塾フォーラムの目的　― 判断基準を身に付ける ―

初めての方も何人かおられますので、中斎塾フォーラムの目的について申し上げておきます。中斎塾フォーラムの基本的な考え方は、知足です。判断基準と思って戴いても結構です。もっともっと・・・と思うのは、ブレーキをかけましょう。分かりやすく食べもので考えれば、腹七分目でやめておくという事です。会社も同じですし、組織体も同じです。知足を色々な角度から考えて、判断基準として身に付けるのが目的です。

知足という言葉は、季刊誌「知足」10 号で関根事務局長が書いてくれていますので、後

ほどお読み戴きたいと思います。

それらを身に付ける為に必要なものが、知識・見識・胆識と判断の三原則（本質・大局・歴史）です。こういうものの見方を、知らず知らずの間に身に付けて戴くと有難いと思っています。

今日の論語

論語は、自分が生きる上での目安になります。論語を自分の身の周りの出来事に置き換えて読むと、非常に役に立ちます。

本日は八佾第三　22～26 章です。

○子曰く、管 仲 の 器 、 小 なるかなと。
或ひと曰く、管 仲 は倹なるかと。
曰く、管氏に三帰有り。官の事 摂せず。 焉 んぞ倹なることを得んと。
然らば 則 ち管 仲 は礼を知れるかと。
曰く、邦君 樹して門を塞ぐ。管氏も亦樹して門を塞ぐ。邦君　両 君の好を為すに、反坫有り。管氏も亦反坫有り。管氏にして礼を知らば、孰か礼を知らざらんと。

孔子が「管仲という人物の器は実に小さいな」と言った。

或る人が「管仲は倹約家でしょうか」と聞いた。

孔子が答えました。

管氏に三帰有り・・・三帰とは、色々な解説があります。三帰の台というのがありまして、そこで遊興・遊観をする。又、夫人が住む館を三帰台という言い方もしています。ここでは、管氏は身分不相応な館を持っていると捉えればよいでしょう。

官の事 摂せず・・・摂するとは兼任するという事です。管氏の家臣は、兼任はしない。一人に一業しかしないから、無駄が多くて遊ぶ時間が多い。

・・・どうしてそういう人が倹約家だと言えるだろうか。

さらに或る人が問いました「であれば、管仲は礼儀作法についてはどうですか」

孔子が答えて曰く、

「各諸侯は門の内側の正面に小さな塀を建てて、見えないように塞ぐのが礼儀である。管氏は諸侯の身分でないのに、同じようにしている。これは分不相応であるし、増長しているように見える。各地の諸侯がお互い隣りの国と友好を結ぶ時に、お酒を注ぎ返す儀式（献

酬）の杯を置く特別な台（反坫）があった。これは諸侯の地位にある人に許されたものなのに、管仲も同じ台がある。こういうふうに増長している管氏が礼を知っているというならば、一体誰が礼儀を知っていると言えるのであろうか」

論語は何度も申しますように、自分自身の身の周りに置き換えて考えて戴くとよろしい。

はたして自分自身の器は大だろうか、小だろうか。自分自身は倹約家だろうか、結構無駄遣いをしているのではないか、遊びが度が過ぎていないか。自分自身を考えて、管仲と似たりと思ったなら、倹約の努力をしなければいけないと読めばよろしいでしょう。

又、これを親しい人間に置き換えて考えてみて下さい。特に補佐役の人だと考えやすいと思います。実際、管仲は中国の春秋時代、斉の国の桓公を補佐して覇権をもたらした人です。孔子が生まれる 100 年くらい前には、既に管仲は大きな業績をなしていました。孔子自身も補佐役として国を充実せしめ、大を成していくのだと考えていますから、管仲について非常に氣にしている。ある程度ライバル視しながら見ているのではないかと感じます。自分の会社の補佐役である副社長や専務を当てはめて考えて、器の人物であれば、大を成していくであろうと考えればよろしい。もし、そのような補佐役がいなければ、覇者にはならないでしょう。

ここでは、管仲という人物は礼儀を知らないと孔子は言っていますが、憲問篇では、管仲は自分の主人を助けて覇者たらしめた、力量がある人間だと褒めています。孔子は、良い面も悪い面も両方公平に見ているわけです。ですからこの章で、孔子のものを見たり人物評価をする時の判断基準が、公平であるという事が分かります。

○子（し） 魯（ろ）の大師（たいし）に楽（がく）を語（つ）げて曰（いわ）く、楽（がく）は其（そ）れ知（し）るべきなり。始（はじ）め作（な）すときは翕（きゅうじょ） 如たり。之（これ）を従（はな）つときは純（じゅんじょ） 如たり、皦（きょうじょ） 如たり。繹（えきじょ）如たり、以（もっ）て成（な）ると。

孔子は音楽については非常にのめり込んでいます。魯という国の音楽団の楽長と音楽を論じた時の話です。

音楽について私は、仕組みはだいたい分かる。仕組みを知る事は、誰でも出来ない事ではない。最初は 12 個一組の鐘が盛大に鳴り響く。次いで、それぞれの楽器がなだらかに合奏されてくる。そして各部門の楽器が代わる代わる独奏して、最後には余韻嫋嫋として音が残っていく。

ここは、音楽についての効用を孔子が言っています。私は学生時代、音楽は得意ではありませんでした。還暦を過ぎてから詩吟を習い始め、今は非常に楽しみな時間です。皆さんも色々な形で音楽に親しむと良いでしょう。

○儀の封人 見えんことを請いて曰く、君子の斯に至るや、吾未だ嘗て見ゆることを得ずんばあらずと。従者 之を見えしむ。出でて曰く、二三子、何ぞ喪えることを患えんや。天下の道無きや久し。天 将に夫子を以て木鐸と為さんとすと。

儀の封人とは、村役人ですが隠者と考えればよいでしょう。

その人が孔子に面会を求めて、「孔子がここにいらっしゃる時は、私は必ずお目にかかることにしている（今までお目にかからなかったことはありません）」と孔子の従者に伝えた。従者は面会をさせねばならないと思って、面会させた。

面会が終って儀の封人が出て来て言いました。「お弟子さん達よ。この亡命の旅をあなた方は心配する事はない。世に道理が無くなって大分経ったけれど、天は孔子をもって世に警鐘を鳴らすだろう」

隠者の見識といったところですね。今の時代、評論家は沢山います。しかし見識を持って話をする人がどれだけいるでしょうか。以前も申しましたが、例えば、評論家と呼ばれる人を一人特定して、ずっとその方の評論を追いかけてみればよろしい。意見がコロコロと変わっている人がとても多いです。それは本物ではないからです。

私は、木内信胤先生の講話録のようなものを、かなりの分量持っています。それを時々ひっぱり出して読み返しますと、全然ぶれがない。同じ言葉を出しても、ぶれない。しかも予見・予測をしたものが外れない。これは大変な人だと、改めて感じています。

本物の評論家と言われる人であれば、10 年前の話が 5 年前にそのまま繋がる。5 年前のものが現在につながるというように、一貫しているはずです。そういう人の話を探し出されると良いと思います。

ですからこの章は、隠者の見識という考え方で読まれるとよろしい。周りの友人・知人・評論家を見て、言葉がぶれない、10 年 20 年経っても言っている内容が変わらない人を見出せばよろしいし、自分自身がそうなればよいと思います。

○子　韶を謂う。美を尽せり、又善を尽せりと。武を謂う、美を尽せり、未だ善を尽さざるなりと。

韶とは、舜という帝王が作った楽曲です。それについて孔子が「韶は美的に素晴らしいし、道徳的にも素晴らしいものがある」と言いました。

武とは、周の武王が作った音楽です。それについては、「美は素晴らしいけれども、道徳的に問題がある」と言いました。

韶と武の比較論です。孔子はどうしても道徳をベースに据えていますから、こういう言い方になるのだと思います。

これはM＆Aで考えればよいと思います。他の会社をお金で買うという行為はどうでしょうか。力任せに他の会社を乗っ取っていくのは、武王の考え方だと感じます。

○子曰く、上に居て寛ならず、礼を為して敬せず、喪に臨んで哀しまずんば、吾　何を以て之を観んや。

孔子が言いました。

高官なのに寛容でない。儀式を行う際に、慎む氣持ちがない。葬儀に臨んだ時に哀悼の情がない。こういう者を見ると、私はいてもたってもいられなくなる。

今の時代で考えます。今朝の新聞に介護に関する記事が出ていました。介護の申請をしたところ、かなりの数が門前払いをくらっているという内容です。費用が激減し（といっても全体で 34 兆円だそうですけれども）、今まで要介護の人が要支援に変わっってしまった話があちこちであるようです。

私の母親も要介護 2 だったのが、要支援に変わりました。本人は何も変わっていないのですが、お役所の判断基準だけが変わりました。この間、脳梗塞で入院しましたから、介護認定をし直してもらい、どのように変わるかと思っています。

介護に関する実態を見ると、「上に居て寛ならず」で、お役人達の何と寛容ではない、度量が狭いことだろうと感じます。日本の国にお金が無いから、あれも削ろう、これも削ろうという事で、どんどん介護の実態は削られています。身の周りを見ると、介護だけではありません。

「礼を為して敬せず」で、礼儀作法を一つの事業として捉えた時に、敬意がない例とし

て一つ挙げますと、高速道路の一律 1000 円の休日割引制度です。一向に慎み深さを感じない。なぜこういう制度が出てきたのかと思います。一つの業務を進めるには、慎み深さや世の中の為になるというものがなければ、役に立つものではない。

麻生内閣は基本的なものの考え方が出来ていません。いわゆる見識がないから、右往左往するだけです。見識がなければ当然胆識もありませんから、実行できるわけがないと感じています。

本日の論語の中で感じるものは、「管仲の器、小なるかなと・・・」という章です。これは時々、自分自身に置き換えて考えます。自分の器は小ではないか・・・と、自分自身を反省する言葉に使うと良いと思います。

心に残る言葉

今日紹介するのは、山田方谷の倹約令です。

方谷は、以下のような倹約令を嘉永三（1850）年に出した。

一、　衣服は上下ともに綿織物を用い、絹布の使用を禁ずる。

一、　饗宴贈答はやむを得ざる外は禁ずる。

一、　奉行代官等、一切の貰い品も役席へ持ち出す。

一、　巡郷の役人へは、酒一滴も出すに及ばず。

『山田方谷に学ぶ　改革成功の鍵』野島透著　明徳出版社

この倹約令のポイントは、「**巡郷の役人へは、酒一滴も出すに及ばず**」という部分です。巡察でお役人が村々を回ると、接待をしなければいけないわけです。お酒を出して、土産を持たせる。中には、土産の中に小判を入れるというような事もする。これは倹約令ではありますが、豪商とか豪農とか上層階級の人達に対して、自粛せよという事です。同時に、視察をされるお百姓さん達に対して、酒は一滴も出さなくて良いと公表したわけだから、胸を張って要求を断わる事が出来ます。これは非常に大きなものだったと思います。このように、ものの考え方をきちんと公布するという事は必要だと思います。

山田方谷について私が書いた『理財論』では、年商 20 億円くらいの会社が、100 億円の借金を背負っていたと書きました。この本を書かれた 野島透さんは、600 億くらいの借金をしていたと書いています。100 億という数字は、お米をベースにして計算していま

す。野島さんは税収で調べています。備中松山藩、今の岡山県の対象地域の税金がどれくらい徴収されていたか、それを現代に合わせて 600 億という計算をしています。

他にも、人件費で計算している数字もあります。当時、住込みで働いてもらう女性の１年間の給料が 1 両だったそうです。東京フォーラムでお聞きしましたら、今、同じ条件でお手伝いさんを雇うとしたら 30 万円くらいだろうという話が出ました。それで計算すると、3600 億になります。

100 億、600 億、3600 億という数字が出ました。これほど凄まじい違いがでます。江戸時代末期は特にそうですが、数ヶ月で金額が変わっています。年代、地域によっても値段が凄まじく違いますから、氣を付けてみなければならないと思います。

翻って今の時代を考えると、これからハイパーインフレが起きる。そうすると１週間くらいで、ものの値段が 10 倍くらいになるのは当たり前です。１ヶ月も経ったら、更に 10 倍・・・これは絵空事ではありません。一昨年、私は経済破綻をした国々を回ってきました。ハイパーインフレが起きたペルーでは、1 週間で借金の金利が 1000 倍になって、氣が狂った社長がいたという事です。世界各国では、ハイパーインフレがごく当たり前に起きましたし、現実に今の世界同時不況と言われる中で、経済破綻が起きた国々が 10 カ国出ました。経済破綻を起こした国の中で、飢え死にが一番酷かったのはロシアです。正確な数字は出ていませんが、おそらく 1000 万単位で亡くなっています。ですから、日本の国の中で起きないという事はあり得ないと思っています。

山田方谷の時代も、日本でごく当たり前に飢え死にが出ていました。当時の日本をみると、飢饉が起きた時に手をこまねいて見ているだけの藩がほとんどでした。山田方谷の備中松山藩は、手を出した。義倉所を 40 箇所に建てて、そこに蓄えたお米を、飢饉が発生した時に領民に配ったという事で、山田方谷は生神様と呼ばれました。

日本の歴史を調べれば、飢饉で飢え死にした人はかなりいます。江戸時代末期もそうですし、終戦直後も食うや食わずの時代もありました。こらへんを考えて、見直しをしなければいけない時期に来ていると考えています。

知識・見識・胆識　― 今の時代に必要なもの・・・自分の身を守る知識 ―

知識は沢山持たねばならないと思っています。今の時代で必要な知識は何かと考えると、自分の身を守る知識はいくらあっても良いと思います。

年末、日比谷公園に派遣村ができて世間の注目を集めましたが、実際に就労できたのは

13 名だったという事でした。派遣村に来ている人達は、住所不定無職で連帯保証人もいない人が多いので、本人が勤めようと思っても勤められない。しかし一番怖いのは、勤める意欲がなくなっているという事です。行列に並んでいればご飯を貰えますから。たとえ職に就いたとしても、どこかでズルをしてしまう。農作業の現場にホームレスの人が仕事に行って、１日２日したら逃げ出してしまったという話も聞きました。

人間は歳をとると、知らず知らずの間にズルを覚えてしまいます。よく、年をとると筋肉痛が翌日ではなく翌々日とか 3 日後に出ると言いますが、これは違うそうです。20 代から 50 代の人に同じように作業をさせると、筋肉痛は翌日、皆同じに出たそうです。年をとると、手抜きを覚えてしまうのです。これと同じように、ホームレスの人は身体が持たないというより、心が持たないのです。働くという習慣が無くなってしまっていると感じます。

これを知識として、今、自分自身の身を守るのに何が必要か考えると、自分で自分の身体のコントロールをしなければならないと思います。何か作業をしたら、翌日に筋肉痛になるような働き方が良いと思います。

身体の話をしましたから、食べものの話を致します。

食べものについては、遠い所から運んできたものを食べる習慣を、日本人は止めた方が良いですね。旬のもので、地元で採れたものを食べる。できれば自分の作ったもの、作っている人の顔の分かる食べものに切り替えなければいけないだろうと思います。

次はお金です。これからデフレスパイラルが進んで、同時にハイパーインフレも起こりますから、お金はきちんと管理をしておかねばいけないと思います。管理の仕方は、専門家の意見を聞くことも良いでしょうが、自分で自分の財産を管理しなければいけないでしょう。

先ほど申しましたように、ロシアのデノミは一番酷いものでした。ソ連からロシアになった時に、銀行からお金を下ろせない条件を作った上で、１万円を 1 円の価値に切り替えるような凄まじいデノミを強行しましたから、地殻変動が起きました。

日本もデノミネーションがあり得ます。なぜならば、今、銀行からお金を下ろしにくくなくなりました。郵便局は特に酷いですね。先日私の母親が脳梗塞で倒れましたが、定期を解約しようと郵便局に行っても、代理人では下ろせませんでした。下ろすためには、何枚もの書類にサインをしなければならないという事でしたが、なにしろ脳梗塞ですから書くのもおぼつかない状態です。これでは、本人が意思表示できなくなった途端に、預金封

鎖だと感じました。これをもう少し違う角度で見ますと、今の日本は、自分のお金であっても下ろせない。振り込みもなかなか出来ない。はっきりしている事は、日本の国は、金融機関から自分のお金を下ろそうと思っても下ろせないという摺り込みがどんどん進んでいる。銀行に行ってもお金を下ろせないと国民に思わせるような政策がとられています。同時に、警察や自衛隊は増強されています。

ですから或る日突然、とんでもない治安の悪化が起き得ると思っています。そう考えると、お金の管理も自分でしなければいけません。ソ連からロシアに変わる寸前に、日本円で１億円くらいのお金をアメリカに預金して、ほとぼりが冷めてから帰って来たら、1 億が１千億に変わったという話を現地の人から聞きました。ロシアの新興成金はそういうお金の作り方もしています。

我々が今後生きていく上で、食べ物の確保・お金の管理・健康の管理、これらが必須だと思います。そういうものを支える為には、やはりどうしても、「人生如何に生きるか」がベースですので、中斎塾フォーラムで「人生如何に生きるべきか」を常に追いかけようと思っています。

「八休」

8 月は私はお休みを戴きます。安岡正篤先生の書かれた『百朝集』の中に「八休」という文章がありまして、たまたま先日、素心・不器会という論語の会で、「八休」を解説する時間がありました。休む時、こういう休み方をするとよろしいと思いましたので、皆様にもご紹介します。

消(は)し難(がた)きの味は食するを休(や)めよ。
得難きの物は蓄ふるを休めよ。
酬(むく)い難きの恩は受くるを休めよ。
久しくし難きの友は交はるを休めよ。
守り難きの財は積むを休めよ。
雪(そそ)ぎ難きの謗(そしり)は弁ずるを休めよ。
釈(と)き難きの怒は較(あらそ)ふを休めよ。
再びし難きの時は失ふを休めよ。

金　蘭生　『格言聯壁』

「休めよ」とありますが、ルビは「やめよ」と書いてあります。中止せよという意味で

す。

消し難きの味は食するを休めよ・・・消化できないものは食べるのを止めなさい。食べものに限らず、人間でも付き合ってみたら、付き合いきれないという人がいます。消化しきれない人物とは付き合うのを止めなさいという事です。

得難きの物は蓄ふるを休めよ・・・素晴らしいもの、宝石であるとかお金であるとか、次から次にどんどん集めていたなら、必ずしっぺ返しにあうという事です。その人にとってふさわしいものを手に入れるのは良いけれども、それに輪をかけて蓄財していくのは止めた方が良い。

酬い難きの恩は受くるを休めよ・・・返せそうもない借金はするな、と考えて下さい。

久しくし難きの友は交はるを休めよ・・・長続きしそうもない友人は、最初から付き合うのをやめなさい。相手の意向に合わせて、何とか自分の氣持ちを変えながら付き合うような関係は長続きしないから、最初から付き合う事はしない方が良い。

守り難きの財は積むを休めよ・・・蓄財しようと思っても、そんなに貯まるものではない。今の日本の税制からいって財産は残せませんし、初代が頑張って貯めて、二代目が使って、三代目が潰すというのが多いですね。ですからそんなに積むのは止めなさいという事です。

雪ぎ難きの謗は弁ずるを休めよ・・・非難中傷は弁解しても駄目だという事です。誰かから誤解されて、非難や中傷されても弁解しない。黙ってじっと耐えるが良い。

釈き難きの怒は較ふを休めよ・・・相手に説明しても分からない無茶な怒り・腹立ちについては、いちいち弁解しない方が良い。相手が怒り狂っている時には、相手に会わない方が良い。

再びし難きの時は失ふを休めよ・・・滅多にないチャンスは必ず手に入れなさい。滅多にないチャンスは、後で分かるものです。幸福の女神は、前から来ると黒髪豊かですが、後ろ髪はありませんから掴めない。後で追いかけようと思っても無理だという事です。肝心なのは、滅多にないチャンスかどうかを見抜く眼力があるかどうかです。

「八休」は、どこかで休みなさいとお考え下さい。自分に置き換えて考えて、今、手控えるものは何か、止めるものは何かをこの中で照らし合わせをしてみるとよろしいでしょう。

知識・見識・胆識　その２　― 自分の身を守る知識 ―

今の時代に必要なものとして、先ほど申し上げた中で一つ付け加えます。

伝染病対策です。

人類は増えすぎています。今回の新型インフルエンザは、豚による新型インフルエンザですが、秋から冬にかけて、鳥による新型インフルエンザが出るであろうと思っています。先日、新型インフルエンザのセキュリティショーを見て来ました。大分、変質していました。

新型インフルエンザの死亡者数について、日本の政府が発表している数字は約 64 万人ですが、この根拠は非常に脆弱です。外国の研究所は、日本人は最大で 240 万人は死ぬであろうと言っていましたが、このままの流れだと、私はこの数字にゼロが増えるだろうと思っています。今の日本政府の進め方からいくと、1000 万から 2000 万人の単位で死ぬかもしれないと感じています。

自分自身の身を守る為に色々な知識をどんどん集めて、ならば自分はそれぞれのテーマに対してどう動くべきか、どう対応すべきか、分からない時は周りの方に聞いて、自分なりの考え方をまとめる事が見識です。それに対して実行する事が胆識です。是非、胆識を身に付けて、自分自身・家庭・地域・自分が所属する団体が、生き延びる、生き残るように努力して戴きたいと思っています。

本日の講話は以上でございます。有難うございました。